

障害なく、また Barrett 食道の悪性化所見も認めず経過観察している。

今回、最近の報告では稀な Barrett 食道潰瘍の 1 例を経験したので報告した。

### 13 高齢者食道癌に対し根治的化学放射線療法後に Salvage 手術を施行した 3 例の検討

牧野 成人・神田 達夫・羽入 隆晃  
番場 竹生・坂本 薫・石川 卓  
矢島 和人・田邊 匡・小杉 伸一  
大橋 学・畠山 勝義

新潟大学大学院医歯学総合研究科  
消化器・一般外科学分野

【目的】近年、切除可能な食道癌に対しても根治的化学放射線療法（CRT）が積極的に行われている。特に高齢者に対しては侵襲が低い根治的 CRT を選択する傾向にあるが、癌の遺残などにより結果的に Salvage 手術を選択する場合がある。当科における高齢者の Salvage 手術について報告する。

【対象】70 歳以上で癌遺残（PR）に対する Salvage 手術を施行した 3 症例が対象。

【結果】3 例とも右開胸先行で、頸部郭清は施行せず、再建は後縦隔経路とした。全例致命的な術後合併症はなく、術後在院期間 44 - 49 日で元気に退院した。3 例とも肉眼的には完全切除（R0）であったが、2 例で病理組織学的に剥離断端陽性（R1）であった。

【考察】Salvage 手術は侵襲が大きいわりに完全切除率が低いことから、根治手術が可能な症例では高齢という理由だけで根治的 CRT とせず、手術も選択できることを十分に説明する必要がある。

### 14 胃嚢胞の 1 切除例

丸山 智宏・原 義明・西村 淳  
清水 武昭・新国 恵也・河内 保之  
平野謙一郎・小野寺真一・高橋 元子

厚生連長岡中央総合病院外科

胃嚢胞の 1 例を経験したので報告する。症例は 28 歳の女性で、主訴は心窩部痛であった。CT、MRI、上部消化管造影、胃内視鏡検査から、胃壁外に突出する胃体上部の粘膜下腫瘍と診断され、超音波内視鏡では充実性腫瘍が疑われた。GIST の可能性も考えられたため、胃局所切除術を施行する方針となった。切除標本では、腫瘤は軟らかい嚢胞性病変で切開を加えると内容は黄褐色粘稠の貯留物であった。病理所見では胃の粘膜下に胃壁構造を持った嚢胞を認めた。胃嚢胞は上皮性のもものとしては多発性びまん嚢胞症、胃重複症、各種ポリープに共存する嚢胞状腺管などがあり、非上皮性のもものとしてはリンパ管腫がある。今回の症例では、嚢胞は粘膜及び固有筋層の構造を持っており、胃重複症と考えられた。GIST の可能性も考慮し手術に至ったが、胃粘膜下腫瘍の鑑別診断として胃嚢胞も常に念頭に置く必要があると思われる。

### 15 Rabepazole にて *Helicobacter pylori* の三次除菌に成功した CYP2C19 het EM の 1 例

合志 聡\*\*\*・青柳 豊\*\*  
津端 聖美\*\*\*

三之町病院消化器科\*  
新潟大学教育研究院医歯学系  
消化器内科学分野\*\*  
津端内科医院\*\*\*

症例は 47 歳、女性。主訴は心窩部痛。既往歴：36 歳時より十二指腸潰瘍。

【現病歴】2003/6/25 GIF で胃十二指腸潰瘍が再発を認め、Omeprazole 20mg 内服。鏡検法で *Helicobacter pylori*（以下 Hp）陽性。8/13 Lansoprazole 60mg + CAM 400mg + AMPC 1500mg 7 日間の一次除菌を施行。9/30 心窩部痛出現し、十二指腸潰瘍（A2）の再発を認め、一次

除菌失敗と考えられた。10/1 二次除菌目的に当科紹介受診。生活習慣として喫煙が1日10本。受診後はPPI 8週間内服を継続しH2RAへ変更した。その後GIFを施行し培養法にてHp陽性、感受性試験ではCAM感受性株を確認した。CAM感受性株のため再度LPZ 60mg + CAM 400mg + AMPC + 1500mgによる2次除菌を行ったが、再度培養法にてHp陽性、CAM感受性株であったため除菌は失敗。CYP2C19遺伝子解析にてヘテロEMであったため、RPZ 20mg + MNZ 500mg

+ AMPC 1500mgで3次除菌を行った。この除菌期間は禁煙を厳守してもらった。その後の除菌判定で成功と判断された。

## II. 特別講演

消化器癌領域における遺伝子診断と臨床応用

山口大学医学部消化器・腫瘍外科学教授

岡 正 朗